

〈原色〉としての韓国

辻野, 裕紀
九州大学大学院言語文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/1687766>

出版情報 : 鳳仙花. 24, pp.81-86, 2010-09. 鳳仙花編集部
バージョン :
権利関係 :

〈原色〉としての韓国

辻野 裕紀

わたしは、昨年、二〇代、大学院博士課程在学中にして、大学の専任講師に採用されるという、この上ない僥倖に恵まれ、昨年三月から、韓国のソウルのある女子大で教鞭を執っている。そして、韓国で日々暮らしながら、しばしばふと浮かぶキーワードがある。〈原色〉ということばだ。韓国には、この〈原色〉ということばがよく似合う。

座布団も然り、韓服も然り、日本人好みの〈淡い色〉とは程遠い。

食べ物もそうだ。辛いものはこれでもかと辛く、見るからに辛そうな「真っ赤から」な原色をしている。甘いものは徹底的に甘く、苦いものはニガキの如く苦く、韓国人はいつも〈原色〉を食べている。また、食べ方も音を立てず静かに食べるのではなく、くちやくちやと音を出

しながら、いかにも「食べている」というような食べ方をする人が相対的に多いように思える。

病院に行っても、〈原色〉そのものが漂っている。病人は文字通り、病人の顔をして、る。絵に描いたような病人である。

街を歩いていても、老人は本当に老人の顔をし、路宿者は本当にホームレスの姿である。韓国のホームレスは、日本のホームレスのように遠慮することなく、それがあたかも自らの「仕事」だと言わんばかりに、堂々と物乞いをする。貧しい人は見た目からして貧しく、一方で、金持ちたちはいかにも「成金」という出で立ちである。酔っ払いの姿も、まるでコントの世界だ。カップルたちもいかにも恋人という雰囲気で仲睦まじく歩く。公衆トイレはどこまでも汚く、大衆食堂の前を通れば、強烈なヤンニョムの匂いに圧倒される。

大学のキャンパスにも、〈原色〉が深く染みついていて、学生はいかにも学生という雰囲気、かばんに入れればいいものを、わざわざ胸に教科書や本を抱えて歩いている。教授も教授らしく、「銜てい」に満ちている。試験のときの学生は全く余裕がなく、自分のことしか考えない。女子学生も野球帽をかぶり、日頃コンタクトの学生も眼鏡をかけ、いかにも「必死で勉強してきました」という身なりで試験に臨む。恋愛中の学生は幸せそうで、失恋すれば悲

しそんな顔をしている。「何かあった？」と学生に声をかけると、「なぜ分かったんですか？」と言う。しかし、すべて顔に書いてある。

韓国人というのは、常に〈原色〉であり、〈いま・ここ〉を生きている。日本人のような未来の見据え方を知らず、物事を〈薄める〉という意識が希薄である。楽しむときは思いきり楽しみ、苦しむときは思いきり苦しむ。腹が立てば男も女も怒鳴り散らし、悲しければ思いきり泣く。勿論、個人差もあるだろうから安易な一般化はできないが、少なくともわたしの目にはそう映る。この前も、「普通」の真面目そうな風貌の女子高生たちが道で大声で互いに罵詈雑言を浴びせながら、丁々発止の殴り合いをしているのを見て、大変驚いた。そして、それを近くの食堂の、それもまた絵に描いたような、いかにも韓国男子という顔の、図体の大きなアジョツシ（おじさん）が飛び出して来て、止めに入っていた。しかも、その止め方というのが、「耳を引っ張る」という、漫画でしか見ないような極めて古典的な止め方で、思わず噴き出しそうになってしまった。日本ではほとんど見られない光景であろう。そして、そうした光景が、わたしには時にある種の〈舞台装置〉のようにさえ見える。人間関係の構図やその場の感情があまりにも分かりやすく、何かの役を演じているように見えるからだ。日本人の目には、一つひとつのことがいちいち大仰に見えたりもする。そういった意味で、韓国人はみな、毎日わたしに大いなる舞台を見せてくれる、優れた役者たちである。〈いま〉

を感情のままに生き、時や垣

イゴ」と大きな声で嘆く。自分の気分が乗ら

なければ、店員が客に対してさえ、無愛想で不親切に振舞う。そうした態度に接して、わたしも激怒し、思わず怒号を上げそうになったことは、一度や二度ではない。

そうした韓国に対して嫌悪感を抱く日本人も多いだろうが、その原因は、彼らにとつて、きつと韓国のこの〈原色〉があまりにも強烈すぎるからではないかという気がする。日本人は〈淡い色〉に慣れていて、韓国に慣れ親しんだわたしに対してさえ、この国はしばしば強烈な色を放つ。それゆえに、胸糞が悪くなるようなことも日常茶飯事である。なぜ常に原色で生きるのか。それがわたしにはよく理解できず、辟易することもしばしばである。〈生〉や〈他者〉というものに対する基本的な〈構え〉がわたしとは本質的に異なるのではないかとさえ思い、暗澹あんたんとした気持ちにもなる。発言もストレートで、なぜもう少し婉曲的なものかと言い方ができないのかと、デリカシーのなさに愕然とすることも多い。年齢、学歴、職業というたった三つのデバイスで、いろいろなことがいとも簡単に決定されてしまうことにも、ある種の違和感を覚えずにはいられない。こうした一連の現実は、あたかも宿痼しゆくゑの如く、わたしの心身を少しずつ蝕んでいくように感じられもする。

しかし、そういう生き方をする彼らと日常的に接していると、それが時として愛おしく感

じられることもあるから不思議だ。時に蠱惑的こわくでさえあるこの国を懐に抱きしめ、相好を崩しながら韓国を語らんとする、所謂、韓国に「はまる」日本人たちは、きつと韓国人のこうした〈原色の魅力〉に惹かれていたからだろう。昨今の韓流ブームで、客観的な分析なしに、偏った情報だけで、「韓国大好き」と言うような人たちについては、わたしにはやや軽佻浮薄に見え、そこに与する気は起きないが、その心境は、わたしにも十分理解しうる。韓国との出会いとは、こうした漫ろそぞろ懐かしくもある〈原色〉との邂逅かいこうにほかならない。

また一方で、韓国と日本は一衣帯水の隣国であり、類似した点も多い。感性も似た部分があるし、うまくコミュニケーションを図れば共感しうる部分も多いだろう。こうして思考を深めていくと、韓国と日本の差異は、おそらく唐辛子の濃厚な「赤」と、桜の淡白な「ピンク」の違いに似ているのではないかという考えに至る。韓国人が日本に逗留し、うまくやっていくためには、その真つ赤な原色を〈脱色〉する学習が必要であり、また日本人が韓国で生きていくためには、原色に対する〈抵抗力〉をつける修行が不可欠である。

〈原色〉としての韓国。言霊ことばたまの幸わう、桜の国・日本に生まれ育ったわたしは、これからも「赤」と「ピンク」の間を全力で駆け抜けながら、日々一喜一憂していくことだろう。日本的な〈静謐せいひつ〉が似合わない錦繡江山の地にまるで通奏低音の如く深く流るる〈原色〉の洗

礼を全身全霊に受けつつ、
〈こきょう 跨境的な生の実践者〉としてのわたしはこれから一体何を学び、
何を得ていくのだろうか。